

子どものための箸トレーニング おもちゃの提案

A2201402 今井千聖

● 研究の背景（概要）

近年、子どもたちの不器用化が指摘されている。それに伴い箸が正しく使えない子どもが増加しているという。また 30 歳代でも箸を正しく使用できる人はわずか 3 割という結果も出ている。大人になってから、正しく箸を持つことができないがために矯正するという人も中にはいるようだ。さらに、近年の洋食文化の定着によりスプーンやフォークを使用する機会が増加した。それとともに数多くある箸のマナーも知らない人が増加してきている。こういったことから幼少のうちから正しい箸の持ち方を身に着けておくことが重要だと考えられる。そこで、子どもでも楽しく練習できる箸のトレーニングおもちゃを提案する。また、子どもとのコミュニケーションを通じて、大人も子どもと一緒に正しい箸の使い方を覚えられるようなものになることを視野に入れながら制作する。

● 研究の目的

研究の背景より、本研究においては、遊びながら楽しく箸の使い方を覚えるトレーニングおもちゃの提案を目的とする。また、親子で遊ぶこともできる要素を盛り込んだ製品になるよう制作する。

● 研究のプロセス



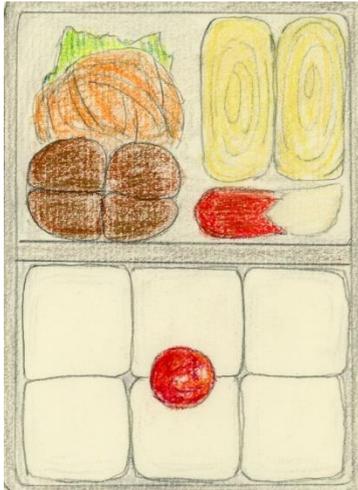
調査の結果、トレーニング箸として挙げられる代表的なものの製品のひとつに「エジソン箸」があることがわかった。リングに指を通すだけで正しい持ち方ができる形状になっている。利点としては簡単に指の配置場所がわかり、自然と箸の正しい持ち方が身につくということがあげられる。しかし欠点として、通常の箸への移行がスムーズに行えないということがあった。

おもちゃの調査からは、代表的なものとして現在「マナー豆」といわれる製品があることがわかった。この製品は 3 種類の形のひよこを模した豆をつまんで、箸のマナーを覚えるトレーニングするといった内容となっている。その他にも箸でものをつまんでマナーを学ぶというアイテムはいくつかあったが、どれも箸本体への工夫は見られなかった。これを受け、本研究ではおもちゃだけでなく箸本体の形状にも配慮した製品を制作することを決定した。

● 成果物

- ・調査から、サポートが多すぎると通常の箸への移行が困難になるという例があるということがわかった。これを防ぐため、指の配置や持つ角度を最低限にサポートできるよう、箸は凹凸のついた形状とした。
- ・箸でつまむアイテムはお弁当をモチーフにして作成し、ご飯やおかずを箸でパズルのようにして箱にしまう形状とした。また、パズルのようにすることでゲーム性の付加を目指した。

・成果物スケッチ



・お弁当の内容は以下のような箸の使い方となるように構成した

ごはん（布製）…四角くてやわらかいものをつかむ練習

卵焼き（布製）…比較的大きくてやわらかいものをつかむ練習

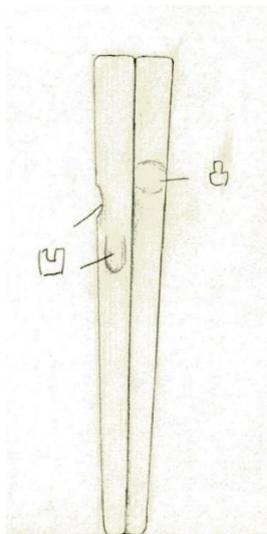
梅干（プラスチック製）…小さくて丸いものをつかむ練習

レタス（プラスチック製）…比較的大きくて薄いものをつかむ練習

スパゲッティ（プラスチック製）…細くてながいものをつかむ練習

ハンバーグ（木製）…ある程度重さのあるものをつかむ練習

りんご（木製）…すべるものをつかむ練習



・箸本体…木製（凹凸によって持ち方をサポートする形状）

凸部をつくる際、3種類のトレーニング箸の形状を比較し、型を取るなどして適度な凸の高さや位置を考えた。

凹部はあまり深くしすぎず、あくまで簡単なサポートになるよう制作した。

● 考察

今回の成果物は、お弁当という形をモチーフにすることで子どもも親しみやすいものになったのではないだろうか。ご飯部分やおかずの一部などはパズルのピースのようにすることで、うまくお弁当の箱に収められるように考えながら遊べるようにした。その結果、それぞれのピースの場所を考慮しながら箸でつまむという作業ができるようになったと思われる。しかし、パズルというにはパーツの組み合わせに対する形の考慮が不十分であるということがわかった。親子で考えながら遊べるような製品にするためには、より複雑な組み合わせを考えるべきだったと感じた。お弁当のなかみのパーツにおいては、布や木、プラスチックと異なるものを素材に使用することで掴み方の感覚に差を持たせることも目指した。これにより、さまざまな質感を箸を通じて感じることで、それぞれの素材に対応した持ち方を子どもに考えさせることができた。さらに、箸の形状は指の置き場をかんたんに誘導する形とした。少ないサポートのなかで、正しい持ち方を考えながら遊べるような形状とした。また、子どもに持たせるにはやはり天然の素材のほうが安心できるという保護者の意見も取り入れ、箸の素材に木を使用した。これによってより手に馴染みやすいものとなったと思われる。

箸を使い、さまざまな大きさや質感のものをつかむという遊びをすることによって、子どもの手の発達を促すことができるのではないだろうか。運動器・感覚器どちらにも当てはまる手先を、おもちゃを通じて使うようにすることでトレーニングに対するマイナスなイメージを取り除きながら動かすことができると考える。